

NEWSLETTER
of
The Japanese Society for Applied Animal Behaviour

No. 15, January 2009

◇ 年頭の挨拶

応用動物行動学会 会長 近藤誠司
(北海道大学北方圏フィールド科学センター)

明けましておめでとうございます。本年もよろしく
お願い申し上げます。

昨年の秋分の日に、私の学生時代の恩師の一人である
廣瀬可恒先生がお亡くなりになりました。享年92でした。
ご遺志に従って葬儀は内々に執り行い、あらためて12月
始めに「偲ぶ会」を執り行いました。先生が助教授の時代
から退官されるまでの門下生を中心に80人ほどの方々お集まりになり、肅々とかつ和やかに先生の思い出を語り合いました。

新年のご挨拶には相応しくない話ではありますが、この偲ぶ会で興味深い話題がありました。ある年齢以上の卒業生がしきりに口にされたことが「私ども牛学教室の卒業生は・・・」という言葉でした。そうです。私どもの研究室である北大大学院農学研究院畜牧体系学研究室は以前は家畜飼養学教室であり、さらにその前は「牛学教室」であったのです。ちなみに馬学教室という教室もあり、ここはその後家畜育種学教室となり、現在の家畜改良増殖学研究室となっています。

さて、本年は丑年です。現在我が国にはおよそ440万頭の牛がいることになっています。家畜としては豚や鶏より遙かに少ない数ですが、それでも馬の10万頭弱やヒツジの1万頭未満に較べれば、草食動物としては大きな数でしょう。乳肉とも牛の頭数は基本的にこの10年で余り大きな変化はありませんが、農家数は激減しています。従って、1戸あたりの飼養頭数が大きく増加している現状にあります。大頭数化および高密度群飼はそれなりに家畜管理システムの面で、また同時に家畜福祉の面からも大きな問題を生んでいることでしょう。そういう意味では、私ども応用動物行動学会の役割は、以前にも増して大きくなっています。

一方、実は各大学の附属施設における牛を始めとする大家畜の飼養頭数は減少傾向にあります。恒常的な定員削減や予算削減など大学をめぐる情勢の経年的な悪化で、もっとも強く影響を受けたのはこうした実際に動物を飼っている施設でしょう。特に、搾乳牛関係は、給餌作業だけではなく



朝夕の搾乳が必ずあるだけに、大学における運営が難しいところです。実際、近辺で見聞きするだけでもいくつかの大学畜産系施設では搾乳牛の飼養をやめて肉用牛に、さらには手のかからないヒツジ飼養へと切り替えているようです。

私どもが標榜する応用動物行動学は、まず丸のままの動物をじっくり観察することから始まるものであります。とくに、学生諸君に応用動物行動学を講義する際に実際の家畜抜きでは画竜点睛を欠くものでしょう。1戸あたりの乳牛飼養頭数の増加が様々な行動学上の課題を示唆している現在、大学における乳牛の減少は、今後一層大きな問題を生むことになりかねません。

古き良き「牛学」や「馬学」といった時代は遙か昔になりました。しかし、様々な現代の潮流は、行動する動物をまるのまま対象にする学問、すなわち新たな「牛学」、「馬学」、「豚学」、「鶏学」、「羊学」、さらに「猿学」や「鹿学」などを必要としているのかもしれない。丑年の始めに、こんな事を考えて見ました。

◇ 春季研究発表会のお知らせ

副会長・大会委員長 上野吉一（東山動植物園）

今年も下記のように研究発表会を開催します。多数の発表をお待ちしています。また、この機会にお知り合いの関連の方々にも声をかけて、学会への加入と発表の勧誘を行ってください。発表申込み時期や要旨の書式が従来とは異なりますので、注意してください。学会メーリングリストで既に書式は送られていると思いますが、分からない方は下記の学会ホームページにアクセスして間違いのないようにしてください。

日時：2009年3月28日（土）

場所：日本大学生物資源科学部湘南キャンパス（神奈川県藤沢市）

発表会申込期限：2009年2月13日（金）

http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm

◇ 2009年度春季シンポジウム開催お知らせ

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)

4月2日から4日まで、栃木県宇都宮市で第147回日本獣医学会学術集会在開催されます。その前日4月1日（水）に、本学会主催、日本獣医学会・日本家畜管理学会共催で、動物の気質や個性、すなわち「性格」に関するシンポジウムを開催致します。動物の行動を人間生活に応用する場合、その動物の気質・個性が非常に重要になります。各分野で活躍されている先生方に、その研究のお話をして頂きます。多くの方のご来聴をお待ちしております。

タイトル

「その性格、なんとかならない？ —動物の気質・個性とそれを知る大切さ—」

日時：2009年4月1日 13:00-17:00

場所：宇都宮大学峰キャンパス 大学会館 多目的ホール

① 「動物の行動から学ぶこと；個性のもとになる気質とは」

森 裕司（東京大学大学院 農学生命科学研究科）

② 「カラスに個性はあるのか？ —学習能力からみる—」

杉田 昭栄（宇都宮大学 農学部）

③ 「ウマの福祉に配慮する —個性が肝心—」

二宮 茂（東北大学大学院 農学研究科）

④ 「犬の気質を知って一緒に暮らそう」

武内 ゆかり（東京大学大学院 農学生命科学研究科）



第147回日本獣医学会学術大会ホームページ

<http://www.jsvs147.jp/>

宇都宮大学峰キャンパスへのアクセスおよびキャンパス内マップ

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/map/index.html>

問い合わせ先：青山 真人（宇都宮大学農学部）

Tel:028-649-5438、FAX:028-649-5401(代表)

e-mail:aoyamam@cc.utsunomiya-u.ac.jp

◇ 公開講演会のお知らせ

佐藤衆介（東北大）

3月28日（土）、応用動物行動学会は、研究発表会終了後、日本畜産学会・日本家畜管理学会との共催で、以下の公開講演会を予定しております。講演会では、世界動物保護協会（WSPA）のM.Appleby博士により、Animal Welfareの先進地域である欧州の近年の家畜福祉研究の動向についてお話していただきます。多く方のご参加をお待ちしておりますので、皆様お誘い合わせの上ご来場ください。

1. 演題” The recent advance in farm animal welfare science”

2. 講演者 Prof. M. Appleby (Chief Scientific Adviser, World Society for the Protection of Animals)
3. 日時：平成 21 年 3 月 28 日 17:00-18:00
4. 場所：日本大学藤沢キャンパス内 資料館, 4 階第 2 講義室 (総会会場)
5. 参加費：無料
6. 予定人数：150 名程度
7. 講演内容概略

Welfare is the outcome of interactions between the animals and their environment. Work on understanding the animals themselves continues to be important, with increasing emphasis on sentience, cognition and emotion and on positive aspects of welfare such as pleasure. However, an animal does not exist in isolation, so work on interactions with the physical environment must consider the social environment, including contacts with humans. Furthermore, decisions about management need to take into account the context in which animals are kept. Animal welfare science must therefore consider the overlap between welfare and other issues and collaboration with other disciplines is essential. This is particularly clear in relation to climate change and agricultural sustainability. Partly because of this overlap (for example between health and other aspects of welfare) animal welfare science is taken increasingly seriously by Intergovernmental Organisations such as the World Organisation for Animal Health (OIE) and welfare scientists are involved in work on integrated welfare indices, standards and guidelines.

問い合わせ先：

青山 真人 (宇都宮大学農学部)

Tel: 028-649-5438、FAX:028-649-5401(代表)

e-mail: aoyamam@cc.utsunomiya-u.ac.jp

二宮 茂 (東北大学農学部)

Tel: 0229-84-7382

e-mail: 2nomiya@bios.tohoku.ac.jp

◇「展示動物の行動調査に関する体験型研修会」の報告

上野吉一 (東山動植物園)

昨年 11 月 7 日に、東山動物園を会場として、行動観察に関する研修会を開催した。学生 14 名、動物園関係者 42 名、一般 (建設コンサル等) 10 名の、66 名の参加を得た。50 名を当初の定員としていたが、熱心な希望者が多く最終的には予定よりも多くの参加者となった。このように関心を持っていただけることは、開催者として非常に嬉しい限りである。

この研修会は主催は本学会だが、共催として東山動植物園ならびに研究会「動物園の生物学」、後援として日本動物園水族館協会にご協力いただき開催することができた。ご協力いただいた関係者の

方々に感謝申し上げたい。

動物園はこれまで、日動水の活動つまり動物園関係者内での活動としては勉強会や研修会はあったであろうが、学会と協力して何かをやるということは少なかったように思う。こうした点からも、今回の研修会は評価することができるのではないだろうか。動物園はもっと外部に開かれたものになるべきだし、学会や研究者も動物園に対し関心を持ちまた学術的な面からの協力を積極的に進めることが、これからの両者の関係には必須と言えるだろう。

この研修会は、具体的には座学（午前中）と実習（午後）の2部構成で行われた。動物園で行動観察する意味はいろいろあるが、昨今の動物園での活動の中で重要なことに環境エンリッチメントがあり、その評価としての観察というものがある。こうした観点から、そもそもの環境エンリッチメントとは何かということと、それに向けて観察をどのようにおこなえばよいか、さらに観察することによってどのようなことが分かるかを、実例を紹介しながら午前中は講義が、わたしと友永、森村の3氏によっておこなわれた。午後は、一般に観察手法としてよく使われる瞬間法を、行動がよく見えやすいアフリカゾウを対象として体験してもらった。同時に、パソコンを用い森村氏が中心となり開発した観察プログラムを用い、記録用紙に書くのと同様のデータを直接入力していった。

1時間の観察後、全体として個々人の記録したデータの整合性を検討し、いかに行動データを記述することが難しい面があるか、すなわち事前準備が必要かを身を持って感じてもらった。そうした作業を進めている間に、パソコンに入力したデータを用い行動の時間配分や空間の利用パターンなどを分析し、自分達が実際におこなったデータからどのようなことが読み取ることができるのかを確認してもらった。

その後、総合討論をおこない、環境エンリッチメントの考え方や実践法あるいは行動観察に伴う問題点など幅広く議論された。予定時間をオーバーするほどの盛況振りだった。

日本においては歴史的経緯も原因となって、最近までは動物園は“見せるための施設”という位置づけで留まってきた。また、研究者側もあまり展示動物に対し関心を向けることなくやってきた。しかし、最近の学生の中には動物園の動物に対し関心を持っている人達が増えてきている。それは本学会の発表演題の変遷からも見て取れる。せつかく世の中に存在する動物園の機能を高めるためにも、またアカデミックな新たな関心に応えるためにも、本学会としても動物園をフィールドとして位置づけたことを積極的にやっていくことはますます必要になるだろう。今後も、積極的に動物園との関わりを持っていくようにすべきだと考える。

◇「展示動物の行動調査に関する体験型研修会」参加報告

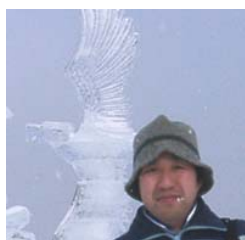
友納碧美（茨城大4年）

講習会は午前中に動物会館で講習後、午後に観察実習をおこないました。午前中の講習では環境エンリッチメント、動物の行動観察法についてのお話がありました。環境エンリッチメントは動物が本来の行動パターンをとれる状態にすることで、必ずしも自然と同じにすることが目的ではなく、

定義が難しいため目標を設定して評価することが大切である。また自然環境は動物にとって最良とは限らないこともあり、種によって環境の持つ意味は異なるため自然環境に近づけるための装置を展示場に設置しても不必要であれば動物には見えなかったりする。環境エンリッチメントについては一概に何が良いのか、どんなアプローチがあるのかは曖昧であり、目標の設定、計画、実施、記録、評価、再調整（SPIDER モデル）を繰り返して模索することが大切であるというなお話があり、実際の現場での取り組みについての話や、飼育員の方達の体験談などにより環境エンリッチメントの実践には多くの障害があるが、それでも飼育員の方達が積極的に取り入れようとしている姿が伝わってきました。

質疑がヒートアップし、かなり遅れて休憩があった後東山動物園で飼育されているアフリカゾウのケニー（♀）の行動観察をおこないました。観察方法は1分ごとの瞬間サンプリングで14項目について観察をおこないました。ケニーは観察開始時には砂浴びをしていましたが、何度か運動場の壁に鼻を伸ばす行動が観察され、何をしているんだろうと疑問に思っていました。その後しばらくして飼育員の方が運動場内に木の枝やチューブにヘイキューブを入れたものを放り投げ始め、ケニーもこの少し前から飼育員さんが投げ入れる場所の前をウロウロしていました。投げ入れられたチューブは鼻でつかむと地面にパンパン叩きつけて少しずつ出てくる中身を食べていました。午前中に動物園動物で拾って食べられるものがあっても食べづらく工夫された餌を選んで食べることがあるという話がありましたが、ケニーも他にも餌はあるのに残り少ないチューブ内のヘイキューブを一生懸命地面に叩きつけて出していました。運動場の壁の上にも餌が隠され、最初疑問に思ったケニーの行動についても解決しました。一度の観察のみで評価することは難しいと思いますが、この給餌方法を始める前は同じ場所をぐるぐる回り続ける常同行動が見られたといことでしたが、それもほとんど観察されず、ケニーが飼育員さんの登場を待ち構えていたように見えた姿などから素人目ではありますが環境エンリッチメントとして有効な手段ではないかと思えました。環境エンリッチメントの評価には今回は項目についてあらかじめ提示がありましたが、最初に項目の設定をおこなう必要があり、短時間でもいいから継続的に続けていく必要があります。上野先生もおっしゃっていましたが、環境エンリッチメントについてはとにかく何かやってみること、そして少しずつでも改善しながら進めていくことが大切であると実感しました。

◇ 学会年会費納入のお願い



会計担当幹事：出口善隆（岩手大）

年会費を未納の方は、年会費（2,000円）をお振り込み下さるようお願い申し上げます。

本年度（2008年度）会費未納会員は43名、2007年度会費未納会員は12名となっております。本学会の収入は個人会費のみです。未納会費金額は、2008年度予算の会費収入金額の35%に相当いたします。このような状況が続けば、学会活動に支障が

出ることも予想されます。

本学会財政を健全化するために、学会年会費のすみやかなお振り込みをお願いいたします。

お振り込み方法

「郵便振替口座」に、年会費をお振り込みください。

加入者名 応用動物行動学会

口座番号 02790-9-13298

なお、お手数ですが、お振込みには郵便局に備え付けの「郵便振替払込用紙」（青色、振込人が振込料金を負担する用紙）をご利用ください。

過去の年会費振り込み状況がわからない場合は、

会計担当幹事：出口善隆（deguchi@iwate-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

◇ 編集後記

寒中お見舞い申し上げます。今回のニュースレターでは、3月に開催される春の研究発表会やシンポジウム、公開講演会の予告、昨年行われました展示動物の行動観察に関する体験型研修会の報告を中心にお届けいたしました。なお、研究発表会の演題募集は、すでに始まっております。本年も多くの方の皆様の発表申し込み、お待ちしております。（ニュースレター担当 小針大助：kohari@mx.ibaraki.ac.jp）